

# 淡青

東京大学広報誌 [TANSEI]

The University of Tokyo Magazine April, 2005 Vol.15

2005/04 15

[特集] 東京大学の新体制

小宮山宏新総長就任

[総長対談] 大学を設計する — 社会と人生と —

／ゲスト 安藤忠雄 (東京大学特別荣誉教授)



総長対談

# 大学を設計する —社会と人生と—

安藤 忠雄 東京大学特別荣誉教授  
小宮山 宏 東京大学総長



現在世界で最も活躍しておられる建築家のお一人、安藤忠雄本学特別荣誉教授をお招きし、小宮山宏総長とご対談いただきました。

大学について考えることは、とりもなおさず社会を、そして地球全体を考えること。そしてまた、わたしたち個人にとっての人生そのもの考えること。

個々人の生き方が大学という場を通して、どのように全世界、全地球につながるのか…

淡青

[TANSEI] 2005/04  
東京大学広報誌 第15号  
The University of Tokyo Magazine April, 2005 Vol.15

15

「淡青」について  
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

平成17年4月1日、東京大学が国立大学法人東京大学として生まれ変わってちょうど1年が経過するとともに、これまで4年間その任にあたった佐々木毅総長に変わり、小宮山宏新総長が第28代総長に就任いたしました。小宮山新総長の就任にともない、理事・副学長の数が、従来の9名から7名体制へとスリム化いたしました。

ここにお届けする淡青15号では、小宮山新総長をはじめとする新体制の役員の方々それぞれの抱負、方針を語っていただく特集、「東京大学の新体制」を準備いたしました。また、本号の特別企画として、建築家、安藤忠雄本学特別荣誉教授をお招きし、小宮山総長と、教育について、大学について、環境について、人生について、そして東京大学の未来と新たな施策について、縦横にお話いただきました。

東京大学が学問の府であることは永遠に変わることはありませんが、法人化から1年を迎え、国立大学法人東京大学は何を目指し、どこへ向かおうとしているのか、新たに変わろうとする東京大学の一端をご紹介します。

なお、本号より横組みのスタイルに改めました。ご感想などお寄せいただければ幸いです。

広報委員会委員長 大木 康

## Contents

02 [総長対談]  
大学を設計する —社会と人生と—  
／ゲスト 安藤忠雄 (東京大学特別荣誉教授)

11 [特集]  
東京大学の新体制  
小宮山宏新総長就任

20 キャンパスニュース

23 インフォメーション



## 大学生になって 正門をくぐる思い

**小宮山** 安藤先生には「UT Forum 2000 in Boston」で初めてお会いして、それからお話を伺ったり、お仕事もいろいろ拝見させていただいています。

大学生たちあるいは若い人たちをごらんになってどのような印象をお持ちですか。

**安藤** 東大の卒業生が事務所に十数人いますが、いろいろと考えさせられますね。仕事に対する愛情が薄い。それは、どこからきているのか。

実は、昨年8月に小澤征爾さんのサイトウ・キネン・フェスティバル松本のオペラの舞台を設計したんです。そのときの小澤征爾さんを見て、音楽に対する愛情と、人間に対する責任感みたいなものがひしひしと伝わってきて、「いいなあ」と思いましたね。

それと、先日、小柴先生が特別栄誉教授の授与式で「東大の正門をくぐったとき、ここで自分が勉強できるのかと思って、すごくワクワクした」といっておられました。私も40年ほど前に、正門から安田講堂をみて、「すごいな。こういうところで勉強している幸せな人たちがいるんやな」と思ったことを小柴先生の話聞いて思い出しました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読んでも、あの当時の人たちの志は高いと思いますね。秋山兄弟もそうですが、なんといっても子規と漱石。子規は東京大学を中退するんですが、東京大学に入ったときは「総理大臣になってこの国のために尽くしたい」と思ったそうです。写真を見ると、総理大臣というより芸術家という雰囲気なんです。その子規が大学に入ったときに大きな志を持っていたという話と、小柴先生の話が重なって、大学の正門をくぐったその当時の人たちに思いを馳せました。

それに、子規は野球の大ファンで、自分でもやっている。俳人「正岡子規」とい

うイメージとのギャップはあるものの、楽しそうに生きているなという感じがしますね。

いまの学生にも、「生きていて楽しい」という姿をみせてほしいと思いますね。

## 他者を感じる力を 養う

**小宮山** 私も本当にそう思います。一般に、人と人とのまじわりが淡泊になってきていますね。人と初めて出会って関係をもつというのは、ある種、緊張感をともないます。いまはコンピュータとかゲームとか、一人の世界に入って閉じこもってられる状況もあって、人とあまり深く付き合わなくても、何となくすぎてしまう。私は、いま一番大事なのは「他者を感じる力」だと思っていますが、それが弱ってきている。もちろん、知識の力は必要です。これは時代の本質をとらえていく力ですから。だけれども、私は学生たちに、喧嘩してもいいから、もっと深くつきあって、他者を感じる力を養ってほしいと思っています。

**安藤** これは大学の教育だけではなかなかできないですね。東京大学の学生たちは、子どものころから成績優秀で、周囲も勉強ができるということで、もてはや部分もあって、なかなか「他者を思いやる」ということまで考える時間がないんじゃないですか。

**小宮山** まずは人と深くつきあう、これが大切でしょうね。

「大学生たちあるいは若い人たちをごらんになってどのような印象をお持ちですか。」



小宮山 宏  
Hiroshi KOMIYAMA

1944年生まれ。72年東京大学工学博士、88年工学部教授、2000～02年大学院工学系研究科長、03年4月副学長、04年4月理事（副学長）。05年4月より第28代東京大学総長に就任。

## 自律分散協調型の 大学を設計する

**小宮山** 私は安藤先生が非常にうらやましいと思っています。安田講堂で退官記念講演をされたとき、安田講堂に入りきれない人たちであふれた。これは、建物によって先生の“思い”がみんなに可視化されるということも、人気を博する理由の一つであるわけです。つまり設計したものが形になってみえる、ということがすごく重要だと思うんです。

私は、いま、大学を設計しようとしています。4000人の教員がお互いに理解を深め、社会に大学でやっていることをみってもらうために、知識が形として表現されることが大事なんです。知識の統合化を大学の中でも打ち出したいのですが、安藤先生の「表現することが仕事そのものである」という、ここに大学も知識の府として学ぶところがあると私は感じています。

**安藤** 小宮山先生は「自律分散協調型」といっておられますが、実際は自律分散型というか、知の細分化がどんどん進んでいっているように感じますね。

東京大学の先生方は、同じ学部の中でもほとんど対話しません。いわんや、別の学部の先生ともです。みんなが自律して、分散しているから、これでは小宮山先生のいわれるような総合力にならない。しかし、先生方はそれで十分満足されていますね。

**小宮山** うーん… ある程度、社会的な評価も受けているし、それなりに満足している面もあるかもしれないけれども、満たされないものも感じているんじゃないですか。

私の専門は工学です。工学は実学ですから、自分の仕事が社会にもっと利用されてもいいんじゃないかと思っていますが、仕事の成果が論文でだされることが多いので、みんなに知られていない。私が委

員長を務めた『動け!日本』緊急産学官プロジェクトの価値は、みんなが社会というものを考えて、社会に役立つように、自分たちの断片的な仕事を統合したことだと思います。あの80人は、友人同士が多かったにもかかわらず、それまでお互いが何をやっているのか知らなかったんですね。あのとき、われわれの仕事の一つに統合できれば何か非常におもしろいものになりそうだという思いを強くしました。

だから、先生方が満足しているかという、その先にあるものというか、もっと社会に寄与したいという思いを抑えながら満足しているのではないかという気がします。

## 生きているという 体感をもつこと

**安藤** 学生たちをみていると、社会に無関心ですね。

**小宮山** そう感じられましたか？

**安藤** ええ。自分の仕事に対する愛情から、国に対する愛情とか、地球環境に対する愛情、世界観、そういうものにまで発展していかなければならないはずなのに、自己完結型にどんどん埋没していつている。

子どものころから、ひたすらセンター試験で優秀な成績をとるために勉強するなかで、あまりにもそちらに重きを置いたおかげで、生きた体験がないんじゃないでしょうか。体験がないから、自分に対する責任感がどんどん薄れていつている。「責任ある個人」には、体験と知識、両方がいると思うんですが… どちらかという体験することによって責任感が生まれてくるんじゃないですかね。

**小宮山** センター試験と先生はおっしゃ

「生きていて楽しい」という姿を見せてほしいと思いますね。



**安藤 忠雄**  
Tadao ANDO

東京大学特別栄誉教授  
(略歴は10ページ)

ったけれども、あまりわき目をふるなどいわれているわけですよ。だから、学生にそれをいってもかわいそうで、ここに社会の教育に対するコミットメントが必要になってくる。インターンシップ\*でも、外国に行ってもいいし。教養学部でも施設を利用した体験実習を企画していますが、いろいろな体験を通して、「他者を感じる力」や「責任感」「社会に対する関心」が培われてくるわけですから、体験をもっと与える機会をつくらうと思います。そのためには皆さんの協力が必要ですね。

\*インターンシップ 学生が企業等において自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う制度

## 知的な好奇心が 人間力を高める

**安藤** 兵庫県が10年前から、中学2年生に1週間の社会体験をさせています。パン屋さんや、工場、農家などに行って、自分が生きていることをしっかり学ばせようということですが、中学2年生の感受性の強い時期にはじめるということはとてもいいことだと思いますね。だんだんと全国の中学校に広がっています。

いまの学生たちは、知識の吸収には全力投球ですが、知的な好奇心は薄いと思うんです。知識と好奇心は別です。好奇

心はいわゆる知識の詰め込みだけではなくかかなくてこないものですし、好奇心がないと次の世界を切り拓いてくれるような子どもたちが育ってこない。

**小宮山** 私もほんとうにそう思っています。サイエンスも、もともと自然に対する好奇心から生まれたものですね。私は大学で若い人たちと30年余つきあってきましたが、実験をやっている、「おもしろい」とほんとうに思った学生は目の光が変わってきます。いままで、チワワみたいな目をしてきた青年が、それこそオオカミの目になるわけですね。あの経験をどこかで積まないと、社会に対する志だとか、他者を強く意識するとか、そういう“人間力”みたいなものはなかなかでてこない。

**安藤** それと、一言でいうと「礼儀」がない。自然に対する礼儀、人間同士の礼儀、生き物に対する愛情や礼儀もありますが、社会自身が礼儀をどんどん切り捨ててきている。先日、地方都市で美しい棚田を目にしました。そのふもとに、突然、コンクリートの護岸があらわれて、美しい棚田をこわしている。自然に対する礼儀は一体どうなっているのかと思いますね。

**小宮山** 教育論では、すぐ「最近の若い人は…」という。しかし、大人がちゃんとしていれば子どもは育つ。いまの学生に対する分析はもちろん必要だけれども、彼

らにどういう機会をわれわれは与えることができるのか、それを考える必要があります。

私は、まず大学のなかでできることをはじめつつ、社会にも協力を求めたいと思っています。工学部では、修士の1年生をインターンシップに2ヶ月だしていますが、企業には「働いている大人の姿に触れさせてほしい」ということでお願いしています。

**安藤** 2ヶ月だったら変わりますね。私の事務所にも建築学科の学生に、5人くらいですが、春と夏、大阪に1ヶ月ほど来てもらい、月～金は模型づくりなどのアルバイトをもらって、土日は、京都や奈良の日本の伝統的な建築を研究する。例えば、大徳寺を自分で選んだら、大徳寺に一日中座って考えたり、スケッチをしたり、図面を描いたりします。何回も行くので顔見知りになったお坊さんから「何しに来ているの?」と聞かれて、対話がはじまることもある。終わったあとに、レポートを書いているんですが、「自分を見つけ出すことができた」という人がときどきいるんです。4年ほど続けていますが、ずっとやっていこうと思っています。2ヶ月もやって学校に帰ると、大学の先生から「安藤さん、礼儀正しくなった。目の色も変わってきて、あのままいくと、ひょっとしたらおもしろいことになるかもしれん」といわれます。

若い人たちはやり方さえある程度うまくいけば、すぐ前に行くんですね。





## 基礎と先端を結ぶ 学術俯瞰講義

**小宮山** 若い人は変わります。だからこそ、大学というのは大事だと思うわけです。

これは大学における学術の陽と陰といえるかもしれないけれども… 陽は、すばらしい先生方がおられていろいろな体験ができるということ。陰は、私は自分の学生時代にも感じたんだけど、大学の先生が授業で教えてくれることと新聞などでみる先端的な研究や技術との距離、自分の将来を考えたときの大学と社会とのギャップですね。そのギャップは私たちの時代よりいまはもっと大きい。大学生になってはじめて聞く講義は、昔とそれほど変わらない、いわゆる基礎ですね。基礎はもちろん重要だけれども、いま教えられている基礎と、先端との距離がものすごく広がっていると思うんです。

駒場で、ずっと前から同じ数学の試験を学生たちに受けさせて統計をとっていますが、得点はどんどん下がっています。だけれども、私はある程度当然だろうと思っているんです。われわれのころにはなかったゲノムや、情報科学など、別の基礎がたくさんできてきているんですから。私たちがやるべきことは、この距離を何とかして縮めることです。そのために、教養の再編成にも勇気をもって取り組む必要もあるでしょう。

先端により近い駒場の教育、このために安藤先生のお力をお借りしたいと思っています。例えば、小柴先生が「いま、物理というのは何を目標しているのか」「これからの物理はどうなるのか」ということを物理学について話すわけ。それで、安藤先生が建築学についてやるわけですよ。

**安藤** 1回ぐらいで？

**小宮山** いやいや、1回だと講演になっちゃうから、4回。それで、藤嶋東京大学特別栄誉教授が無機化学について、無機化

学はここがポイントだと思っているというのを4回。そうすると12回でしょう。それが“教養”ではないかと思いますが。

私は「学術俯瞰講義」という名前にしようかと思っていますが、冬学期からはじめたいと思って教育担当の古田元夫先生と相談しているんです。

## コンピュータはレベルアップしている、人間はレベルダウンしている？

**安藤** この10年のコンピュータの進歩、まあ、進歩とっていいと思いますが、それが、人間の片方で好奇心を広げ、片方で狭める、両方の作用をしていると思うんです。いまのところ、広がるより、狭まっているのではないかな。われわれの建築の世界でも、図面から何から何までコンピュータです。コンピュータはあらゆる研究のもとに総合力でレベルアップしているけど、人間はそれについていけなくて、自分がどの場で頑張れるのか、ということがなかなか理解できないままに時間がたっている。全体像がみえていなくて、混乱している状態ですね。

**小宮山** 半導体の分野でもまさにそれができています。20年くらい前までは、全体をみることができた人はいましたが、それはショックレー(米国の物理学者。「トランジスタの父」と呼ばれる)が足の3本立ったトランジスタをつくったところからやっていった人です。あそこからやっていた人は、どんな複雑にみえても、全体からいまやっていることが構造的にみえたんです。だけれども、いまはもう全体をみることができない人はいません。特に、若い人は、途中から入ってきて、深さ1ミクロンの孔をほれなんていわれても、なんのためにほる

のかかわらないわけです。

3足のトランジスタに戻ることはできませんから、全体像と細部をどうやって二つながらみえるようにするか。ここが大学に問われている本質ではないかと思っています。

**安藤** そうですね。それには小宮山先生のいわれたように、自律分散型をもうちょっと協調型にしないとイケないと思うんですが、それは大学の一つの役割ですね。

もう一つ、地球はいのちがあるものです。いのちがある世界と、自然に少し無関心な人たちが仕事をしている人工的な世界、この2つの世界がどんどん離れてきています。

## 自律分散協調系の 実践例としての 瀬戸内オリーブ基金

**小宮山** 自律分散協調系というと、私にとっては瀬戸内オリーブ基金\*が非常に具体的なイメージなんです。豊島、直島をはじめ、緑の再生を目指していますね。価値があると思う目標があるから、みんなと一緒におもしろがってやれるんですね。

\*瀬戸内海の島々や沿岸にオリーブをはじめとする樹木を植え続けることで、産業廃棄物の完全撤去を待つ豊島の人々が夢見たかつての緑あふれる瀬戸内海の風景を取り戻し、本当の意味で豊かな暮らしのできる場となることを目指し設立された基金。

**安藤** ええ、もう瀬戸内海の島々や沿岸部全域に活動が広がっています。

**小宮山** 大学の先生は自律分散に決まっているんです。協調の仕掛けをつくるためには、具体的に燃えられる目的が必要だと思っています。

私が、いま考えているのは、知の全体像をもう一度持ちたいということです。具体的な目的、おもしろがるものをつくりたい。

「学生時代に、後で「しまった！」と思わないくらいに、もっと死に物狂いでやらなければいけないことはいっぱいあるだろうと思うんですが、」 — 安藤 —

その手始めに、物理化学的な“ヒト”に向けて、ゲノムなどのいろいろな最先端の知を統合しようと思っています。

**安藤** 大事なことは人々が「いのちある地球」を体感することです。日本は、急成長した1960年代から、国土を随分破壊してきました。「人間がともに生きてきた美しい自然をもう一回見直さないかん」という思いから、瀬戸内海にオリーブ基金をはじめたんです。これはオリーブという名前ですが、その場所の植生に合った木という意味です。1000円の募金で100万人集めようという運動をしながら、片方では産業廃棄物やゴミなどの問題をずっとみながら建物をつくっています。

瀬戸内オリーブ基金の一環で「ドングリ大作戦」という、ドングリを種から育てていく活動をしているのですが、あちこちの小学校で、われわれの運動に賛同してくれました。一校でドングリを3万個拾って、これはだめだというやつを選別して取り除いて、残りを土の中に入れますと8割発芽するんですね。それを子どもたちが2年くらい育てて、はげ山に戻っていますが、そのことを通して、いのちのあるものには育つものと育たないものがあるということを感じます。成績のいいやつもいるけれども、野球の上手なやつもいる、魚を獲るのがうまいやつもいるし、魚を育てるのが得意なやつもいる。いろいろな人間がいるように、植物にもいろいろあるんだということを子どもの時代に体で感じたほうがいい。そして、土の中でしっかりと育ててきたものを山へ戻すことによって、社会

や家族に対する愛情を育み、そして自分たちの生きる大きな力になると思っています。です。

では、「生きるエネルギー」がどこからくるのか。親が子どもを育てるときに、「この子のためならば、すべて投げうってもいい」という、いのちの関係というがありますね。そのいのちの関係が非常に薄くなっているのではないかと。子どもたちにいのちの関係を体で感じてほしい。子どもたちは、土の中にドングリを入れて、育てのを楽しみにしています。育てきたらすごく感動するんですね。こういうことを子どもの時代に体験したなかから、先生がいわれている総合力のある子どもがでてくるのではないかと考えています。そういう子どもが10人に1人でもいいから、育ててほしい。



瀬戸内オリーブ基金「どんぐり大作戦」  
子供たちと約3万個のどんぐりを拾った

小さいドングリの話から、今度は京都市議定書の話になりますと、われわれの事務所にいる卒業生は環境や周囲のことに無関心なんです。基本的に、自分の限られた興味の対象にしか目を向けない。そして、関心があったとしても立ち向かう勇

気がない。自分たちが地球温暖化を騒いでも何もできないのではないかと。いま、地球に60億人いる一人ひとりが考えたら、地球の温暖化に少しは役に立つというふうには思わないんですね。いまはセンター試験のような知識詰め込み教育が中心ですから、いのちや地球を体感することなどは切り捨てられてきているんですね。

## 大学と社会が 本気でぶつかる

**小宮山** いまおっしゃった「小さいころ」からということと、もう一つは60億の中の一人がやっても、という無力感を克服していく、そこが成長の過程で重要だと思っているんです。いま「10人に1人でもいいれば」とおっしゃったでしょう。そういうふうになるには、子どもも大人も、相当の経験が必要なんじゃないでしょうか。

私は、変わると思います。それこそ30～40人の組織だったら、2人か3人、この組織を変えようと思う人がでてくると変わります。ある種の合理性を持って、熱があって、「生きる力」のある人たちがいれば。いままでもいい方向だったり、悪い方向だったりするけれども、それなりに変わってきている。無力感を救うというのは、やっぱり大人でしょうね。

**安藤** 無力感というか、実感がないとい



うことでしょね。もう一つは、社会と距離を持って冷静ですね。「そんなことをやっても、何も変わらない」といってしまう。「もう一つ踏み込め」と。責任ある個人の集団がぶつかりあって、はじき飛ばされたり、またひつついたりしながら大きな力になっていく。大学は象牙の塔で、社会とは遠い世界にみえますね。責任ある学校と責任ある社会というものが本気でぶつかっていないと思うんです。

**小宮山** 私は工学部のときに、大学が大学である理由はなんだろうかと一所懸命考えたんです。確かに象牙の塔だといって批判されている面はあります。しかし、象牙の塔的なものがなくなったらいいのかというと、そうではないと思うんです。

私はパイロット部局とっていたんだけど、例えば武田先端知ビルが特区みたいな形で、産業界の人も、NPOの人も、大学の人も一緒になって、社会と本気で向き合うみたいなどころと、象牙の塔的な大学の伝統を守りつつ、必死で学術をやるみたいなどころと、それからその中間と、大学全体として三層構造をつくっていくことが必要だと思っています。

## 学生たちよ、 自分の先にある 世界を見よ

**安藤** 私は仕事をしていて、「もうちょっと

勉強しておいたほうが良かった」と思うことが多くあります。西田幾多郎先生と和辻哲郎先生の記念館を設計依頼されてつくりましたが、和辻先生の本は多少読んでいたんですが、西田先生の『善の研究』を読んだことがない。早速、西田幾多郎を読むわけですけれども、もちろんなかなかついてはいけません。

学生時代に、後で「しまった!」と思わないくらいに、もっと死に物狂いでやらなければいけないことはいっぱいあるだろうと思うんですが、このことをいっても、学生たちはさめているんですね。センター試験に通って、東京大学に入って、気持ち安定している。だけれども、学問に安定はないわけでしょう。いまの学生たちは、自分が追求していく学問の先に、世界中の知性がぶつかり合っている世界が上にあるんだという認識があるのか、自分の先にある世界をみて、不安いっぱい頑張っているかということ、意外と不安じゃないんです。賢いから、自信があるのかもしれない。

**小宮山** それこそ、学術俯瞰講義が必要なんです。

若い人の自信って、自分の経験でそう思うんですが、非常にあやふやな、あるときは何でもできるように思っても、あっという間に崩れる。

**安藤** 自信が崩れたとき、もう一步、二歩、前に踏み込んでいく勇気があるのか。勇気を持つためには、エネルギーがいる。そのエネルギーは、自分の家族とか、い

のちあるものに対する愛情だと思うんですが、そのエネルギーの部分、「どうしても、このために頑張るぞ」という思いが欠落している。片や、今の学生たちは自信はあるけれども、不安がないから緊張感もない。

**小宮山** これは永久のテーマです。『誰がために鐘は鳴る』の映画で、ロバートが怪我をして、マリアや仲間を逃がすために自分が残るんだけど、そのときに、「自由のために死ぬ。いや、死ねない。祖国のために死ぬ。いや、死ねない。マリアのために死ぬ。これなら死ぬ」というラストシーンを覚えています。そういう話です、先生の話は。

## 大学は叡知の中心、 都市の中心

**小宮山** 先生は著書のなかで、「都市はいろいろな人がいて、その人たちが協調して成り立っていく。特に広場という空間が大事だ」ということをおっしゃっていますね。

**安藤** 基本的に広場というのは、人間の魂の交流の場所、いのちに対する愛情の交流の場所です。その広場の一つが大学になるでしょうか。叡知をみんなが愛情をもって作りあげていく、それを社会の人たちが察知して、お互いに対話しながら、



大学をつくりあげていくということですね。

**小宮山** 新しく町をつくる時、大学を中心にできた町は成功していますね。

**安藤** ええ。ところが、この20年、大学を全部郊外にだしたんですね。大学を中心に、いわゆる知というものを中心に都市があるべきなのに、大学を外にだしてどうするのかと思いますね。そういうふうにしてきた都市が衰退していています。これはゆゆしき問題だと私は思います。

**小宮山** いまのお話は都市のなかの大学ということでしたが、今度は大学を一つの都市に見立てたとき、そのなかでの広場になり得る空間ということでいえば、昔は山上会館がファカルティクラブだったんです。飯を一緒に食ったりして、そのときに分野の違う先生たちが交流して、新しいものが生まれた。だけど、それは教員が100人くらいのときの話ですから、私たちは4000人という前提でつくる必要があるんですね。

**安藤** ハーバードやエールに半期ずつ行っていたんですが、ファカルティクラブで他分野の人たちや外国の人たちとも交流しています。いわゆる広場になるところが必要ですね。

**小宮山** 駒場に非常にいいファカルティクラブが今度できました。4000人だから、いろいろな形でやる必要があるんでしょうね。

**安藤** 外国の先生たちとも自由に交流できないといけませんね。外国の人たちにとっては、国立大学は大学の先生方が思われている以上に敷居が高いです。特に、日本はアジアの一員ですから、アジアの人たちにとって敷居が高くては、次の一歩が前にでないですね。

**小宮山** 近代の日本の大学は外国の学術を輸入してつくりましたが、自分たちで育てるというのが今なんだと思うんです。必要な知を大学で新しくつくっていく、これが根づきだすと、学術がもっと身近なものになると思うんです。

## 新総長に望むこと

**安藤** 20世紀は片方で戦争の世紀、片方でグローバルといいながら、商業主義的の世紀です。生活文化が中心の21世紀は、文化の中心の大学というものが果たす責任は大きいと同時に、先生方の責任は大きいと思うんです。小宮山先生が

いわれたように、分散型ではなしに、総合力で、どういうふうな社会に自分たちが発信していけるかということ、個人個人が考えなければいかんと思うんですが、まだ私がみる限りにおいては、先生方は自分の世界で頑張っておられる。小柴先生ぐらいになると分散型ではなく、協調型も兼ね備えていらっやいますね。

**小宮山** おっしゃるとおりだと思いますね。自律分散でこれだけいい人がいるところですから、広場を通じ、社会との間の広場もつくりながら、自律分散協調系の協調の仕掛けを総長としてつくっていきたいと思っていますので、ぜひご支援をお願いいたします。

(2005年2月25日 懐徳館にて)

### 安藤 忠雄 略歴

学 歴	独学で建築を学ぶ	
職 歴	昭和44年	安藤忠雄建築研究所設立
	平成9年11月	東京大学大学院工学系研究科教授
	平成15年3月	同職を退官、同年6月3日付け名誉教授
	平成17年1月	東京大学特別名誉教授
受 賞 歴	昭和54年	「住吉の長屋」(1976)で昭和54年度「日本建築学会賞」受賞
	昭和60年	フィンランド建築家協会より「アルヴァ・アアルト賞」受賞
	昭和63年	1989年度「フランス建築アカデミー大賞(ゴールドメダル)」受賞
	平成5年	「日本芸術院賞」受賞
	平成7年	「朝日賞」受賞
		1995年度「プリツカー賞」受賞
	平成8年	「高松宮殿下記念世界文化賞」受賞
	平成9年	イギリス王立英国建築家協会(RIBA)「ロイヤルゴールドメダル」受賞
	平成14年	「2002年度アメリカ建築家協会(A. I. A)ゴールドメダル」受賞
		ローマ大学名誉博士号
		第18回「京都賞」受賞
	平成15年	文化功労者
会 員	アメリカ建築家協会、英国王立建築家協会、フランス建築学会	
主な建築作品	昭和51年	大阪「住吉の長屋」
	昭和63年	大阪「光の教会」
	平成6年	大阪「大阪府立近つ飛鳥博物館」
	平成7年	パリ・フランス「瞑想の空間」UNESCO
	平成12年	淡路島「淡路夢舞台」(国際会議場、ホテル、温室、野外劇場、庭園)
	平成13年	セントルイス・アメリカ「ビューリッツァー美術館」
	平成14年	東京「国際子ども図書館」

他多数

# 特集 東京大学の 新体制

## 小宮山宏新総長就任

法人化から1年…

新体制のもと、さらに生まれ変わろうとする  
東京大学の未来と新たな施策



2005年4月1日、  
小宮山宏東京大学総長が誕生しました。

これから4年間にわたって、国立大学法人東京大学の舵取りにあたる小宮山新総長のプロフィールをご紹介するとともに、総長就任にあたっての抱負、具体的目標を語っていただきました。また、総長を支える副学長・理事・副理事にもそれぞれの抱負と施策を示してもらい、特集「東京大学の新体制」を企画しました。



# 世界一の 総合大学を目指す

## 熾烈な大学間競争

大学は現在、世界的な競争環境におかれています。人材育成の場として、未来を牽引する研究の場として、社会との間で知が交叉する創造の場として、どの大学が21世紀をリードするのか、リーディングユニバーシティ間の競争は熾烈を極めます。こうした重要な時期に総長の指名をいただいたことは何よりの光栄であると、身の引き締まる思いであります。学内外の皆様のご協力とご支援を得て、世界一の総合大学を実現したいと深く心に期しております。

大学の使命は、いうまでもなく教育と研究にあります。さらに、社会の知が結集して新しい概念を産みだす場となることにあります。したがって、優秀な若者に、トップクラスの研究者に、問題意識を抱くすべての人々に、いかに魅力ある環境を提供できるのか、それが大学の競争力の本質です。

魅力ある大学環境の第一の要因が、魅力ある人々の集積にあることは申すまでもないでしょう。そうした意味で、東京大学に集う最優秀な教員と学生は、私たちの競争力の源泉となっています。しかし一方で、教室、キャンパス、研究室、研究施設、図書館、宿泊施設、運動施設、奨学金といった周辺環境において、日本の大学は世界に遅れをとっております。世界から人材が結集する、すべての人々に開かれた、世界一の総合大学となるために、環境の整備を加速度的に進めることも、総長の重要な役割であることを強く感じております。

## 自律分散協調系

大学は、その成員が自らの確信に基づいて行動する場です。その確信は時には崩れ変化することもあるのですが、その変化も他からの強制ではなく自律的になされなければなりません。それが知の創造の場、最高教育研究機関として不可欠な条件であることを、人類は歴史の教訓から学んだのです。しかし一方において、組織として十分効率的に機能しているのか否か、大学は社会から鋭く問いかけております。この問いかけに対して、世界の大学人が明快に答えているとは残念ながら申せません。

自律分散協調系という、生命体を表現する概念があります。例えば人の場合、心臓や肝臓といった臓器は体内に分散して存在し、それぞれ自律的に動いていますが、それら要素の総体としては協調的に機能し、生命の営みがなされています。この概念は、まさに大学のあるべき姿を象徴するものではないでしょうか。しかし現在の大学の状況は、自律分散的な面が強調され、協調性が薄らいでいるかのように私の目には映ります。もし、ここに協調の仕組みを導入することができたとするならば、大学全体としての研究や教育の機能が飛躍的に向上することは疑いありません。自律分散協調の実現に成功した大学は、21世紀の新しい大学のモデルを提供することになり、世界のリーディングユニバーシティとしての評価を獲得することになるでしょう。

「自律分散協調」をキーワードとして、機動力のある中枢、緩やかな分権、柔軟なインターフェイスという三つの仕組みを適切に動かすことで、活力ある大学のモデルを開発していきたいと思っております。そうすることで、言葉ではなく事実によって、社会からの問いに答えることが可能になるでしょう。

小宮山 宏 Hiroshi KOMIYAMA

昭和42年3月 工学部卒業  
昭和47年3月 大学院工学系研究科博士課程修了  
昭和63年7月 教授(工学部)  
平成12年4月～平成14年3月 大学院工学系研究科長・工学部長  
平成15年4月 副学長  
平成16年4月 理事(副学長)  
〔所属講座(研究部門)〕 反応プロセス工学講座  
〔専門分野〕 化学システム工学、機能性材料工学、地球環境工学

## 知の構造化

20世紀における学術の進歩は、学術領域の極度の細分化をもたらしました。日本学術会議に登録されている学会の数が900をはるかに越えるという事実にも、領域の細分化は如実に顕れています。専門を異にする人々の相互理解は著しく困難になっています。また、東京大学は現在4000人におよぶ教員を擁しております。こうした大学の巨大化と領域の細分化とがあいまって、それぞれの自律性が強調され、協調性が希薄化しているというのが大学内部の現状といえましょう。

外部との関係でいえば、大学に対する社会の要請の多様性に留意する必要があります。宇宙の果ては何かといったナイーブな好奇心への答え、環境といった複雑な問題への包括的な解、あるいはまた、生産活動のひとつの局面のみに必要な高度な専門的知識など、多様な知を多様な社会が求めています。細分化した領域における熾烈な競争の中で、知の創造にしのぎを削る大学人にとって、こうした期待に直接応えることは容易ではありません。知識の再構成や、先端知の分野共通的な表現など、困難な作業が必要とされるからです。したがって社会に対する説明責任を果たすためにも、教育研究内容のさらなる向上のためにも、大学としてなんらかの行動を起こす時期が到来しているのです。

知の構造化は、こうした困難を克服するための基盤となり得ましょう。それは、細分化した知識を相互に関連づける営為であり、研究者が自らを全体像のなかに位置づけることを可能にし、テーラーメイドな教育や、先端と基礎との距離を短縮する教育を実現し、社会の

要請と人類の知との交叉によって新しい概念を産み出すことを可能にするための挑戦です。それが結局、拡大してしまった学術と人との間の距離を短縮するであろうことを確信します。

卓越した研究をいっそう推進しつつ、「知の構造化」を進めることによって、学術の成果と社会の問題が交叉する場となり、新しい学術領域、社会のモデル、産業を産み出してゆくことが可能になるでしょう。





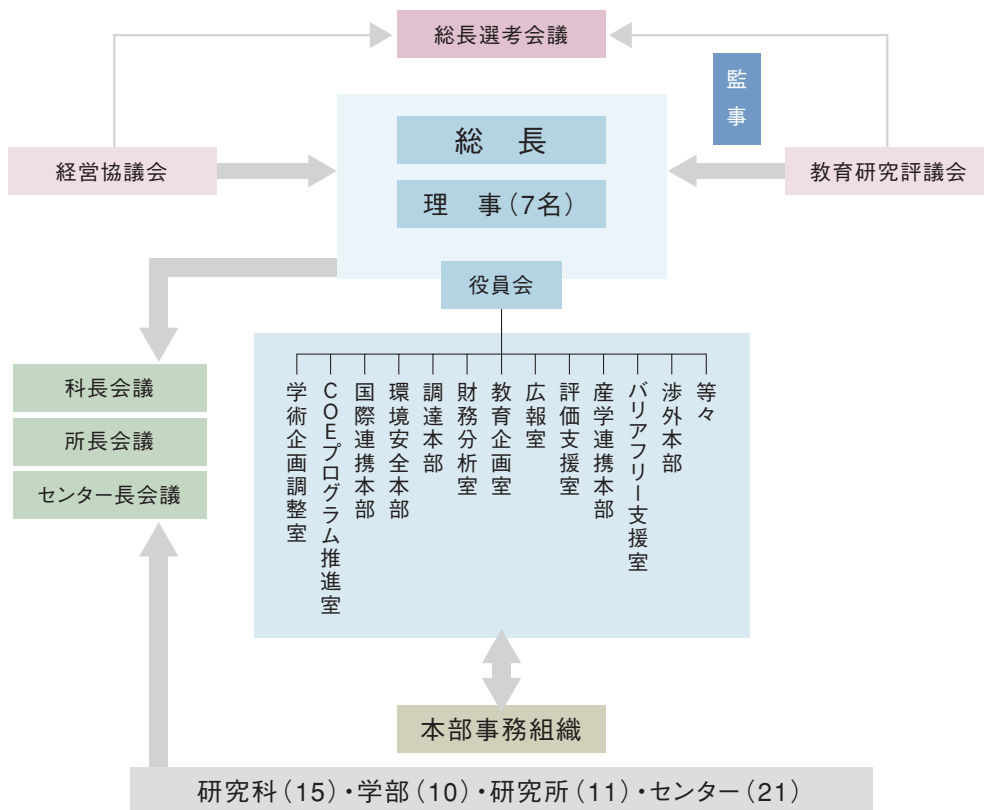
## 本質をとらえる知・他者を感じる力・先頭に立つ勇氣

現在、人類は多くの問題に直面しています。貧困の問題、民族問題、テロリズムの問題、地球環境問題、エネルギー資源の問題、高齢化社会の問題、過疎の問題、大都市に付随する数々の問題など、文字通り枚挙に暇がありません。今こそ、人類の英知を結集して、こうした問題の解決を図らなければなりません。ところが、20世紀に知識が爆発的に増えた結果、かえって、知を有効に使えないというジレンマに陥っているように思われます。つまり、21世紀が抱えるさまざまな困難の背景には、全体像を把握できなくなったという知に関する基本的な問題が潜んでいるのです。

東京大学は、世界の先進大学として、知を産みだし続けてき

ており、今後もいっそうその質と量を高めてまいります。同時に、知の構造化の研究を進めることによって、爆発的に増大した知識の洪水に流されない、強靱な知性を有するための努力を積み重ねてまいります。それによって時代の困難に立ち向かうことが可能になるでしょう。そして、そうした困難に対する戦いの先頭に立つ人材を育みたいと考えております。知識の洪水に流されない「本質を捉える知」、独善に陥らない「他者を感じる力」、そして、「先頭に立つ勇氣」を備えた、21世紀が求める人材を輩出する場であらうと心に期しております。知の時代である21世紀に、「知の復権」を成し遂げるとというのが、東京大学総長としての決意です。

国立大学法人 東京大学組織イメージ



## 研究・国際交流担当の理事として



桐野 豊

国立大学法人東京大学理事  
東京大学副学長

担当：研究、国際交流、環境安全等

大学は社会が必要とする「知」の在るところ、「知」を創出するところである。大学内のどこに知が在るのか。それは、大学人の中に在る。大学の教員はいわば無形文化財のような存在である(べきである)。営利企業においては、ヒトはコスト(人件費)であるが、大学においては、ヒトこそが真の資産であり、outputである。

科学(=科に分かれた学問)はその名前に表れているとおり、その内在的發展則にしたがって発達するにつれ細分化していくことをその本性の一つとしている。したがって、一方で全体像を明らかにする活動「知の構造化」が行われなければ、いわゆる「タコツボ化」に陥る危険性をとまなう。さらに、これまでの日本の大学組織は、産業

構造に対応して設立された学部連合体のようなものであったため、学問固有の構造がみえにくくなっていた。平成17年度には、いくつかの学問分野において、学部横断的に、俯瞰・構造化、統合化を試みる予定である。その第一号として、東京大学のほとんどすべての部局にわたって分散している「生命科学研究者」の活動を、パッチャルな組織としての「統合生命科学機構(仮称)」の中に組織化することによって、「東京大学の生命科学の構造化」を行う計画である。

しかしながら、現代社会においては、知的生産は大学だけではなく、社会の様々なところでなされる。また、現代社会が直面している大きな課題(例えば、Global Sustainability)は、大学のみで、あるいは一国のみで解決できるものではなく、学問領域、大学、国境を越えた共同作業が必須である。平成17年度には、東京大学はアジア、特に中国との連携を強化する予定であり平成16年度に準備された北京リエゾンオフィスを開設し、稼働させる計画である。

### 桐野 豊 Yutaka KIRINO

昭和47年3月 大学院薬学系研究科博士課程修了

昭和60年10月 教授(九州大学薬学部)

平成5年10月 教授(薬学部)

平成13年4月～平成16年3月 大学院薬学系研究科長・薬学部長

[所属講座] 生体分子機能学講座

[専門分野] 神経生物物理学

[研究内容(代表的な著書や論文等)] 学習・記憶の分子・神経機構

## 東京大学のさらなる発展に向けて



西尾 茂文

国立大学法人東京大学理事  
東京大学副学長

担当：財務、施設、キャンパス・交通、柏、病院等

東京大学は、昨年(2017)の4月から国立大学法人東京大学となりました。法人化のために多大な時間と労力をとをさいて準備をおこない、初年度の運営等に携わられた佐々木前総長、および前理事の方々ははじめとする多くの教職員の方々に敬意を表したいと思っております。

私は、大学外の方々から「大学の法人化とは何か」と問われた際に、「保障から保証へ」と説明して参りました。すなわち、大学において自治が保障されることは学術活動を行ううえで不可欠なことで、社会から付託された「自治」により何を社会に還元するかを明示的に保証することがいま求められていると考えています。この「保障」と「保証」とは相矛盾する側面をもっており、この二項対

立の解決の道を見つけることが大学運営に必要であり、また難しさでもあると思います。文化の多様性と摩擦を起し得るグローバル化などの地球規模の波から、欧米諸国が必ずしも例とならない「ポスト・キャッチアップ」時代などの日本規模の波まで、わが国の大学は様々な波に洗われています。こうした波に対して、上記の二項対立の中で、東京大学がいかなる道をとるべきかを構成員全員が考える必要があると思います。

東京大学が真に自律性をもって未知の道を切り開こうとすれば、試行する自己財源が必要です。社会あるいは世界に開かれた大学を目指すのであれば、その機能を果たす現状以上の施設・設備が必要です。東京大学のさらなる発展に向けて、船出した法人の基礎作りには微力を尽くすつもりでおりますので、よろしくお願いいたします。

### 西尾 茂文 Shigefumi NISHIO

昭和52年3月 大学院工学系研究科修士課程修了

平成7年4月 教授(生産技術研究所)

平成14年4月～平成17年3月 生産技術研究所長

[所属講座(研究部門)] 機械・生体系部門

[専門分野] 熱制御工学

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

相変化現象など熱事象学、ヒートパイプ、ヒートシンクなど熱制御デバイス工学、ソフトエンジンなどエネルギー工学



## 抱負



古田 元夫  
国立大学法人東京大学理事  
東京大学副学長  
担当：教育、学生、入試、留学生等

東京大学は、依然として、そこに入学を果たすこと、そこを卒業したことが、大きな価値をもっていると思なされている面がありますが、東京大学が勝負をしようと考えているのは、入学をしてから卒業をするまでに大学が提供する教育の中身です。

東京大学は、学問のおもしろさに目覚め、学問をしようという志をもった人材を育てたいと思っています。これは、将来研究者になろうという人に限定された課題ではなく、社会のあらゆる分野で活躍する人に共通して、大学として果たすべきことです。

東京大学における教育が、このような方向で学生に刺激を与えるには、基礎の勉強をしている段階から先端的な研究に触れるという

意味での「先端性」、その分野の学問がもっている社会的意味を十分に理解するという意味での「社会性」、そして、現実の社会や自然の生々しさに触れるという意味の「現場性」が大切な意味をもっています。こうした三つの刺激に学生をさらし、一歩前に踏み出す勇氣、先頭に立つ気概をもった人を育てるのが、東京大学の教育面での急務だと考えます。

こうした教育の質的な向上のためには、研究が深まれば教育は自然によくなるというのではなく、教育を独自の課題として考え支援するシステムをつくらなければなりません。この4月には文科省の特別教育研究資金の支援を受けて工学部の工学教育推進機構と教養学部の教養教育開発機構がスタートをしますが、この二つの学部の機構を牽引力に、全学的に教育をサポートする体制を整備したいと思います。それを通じて、学生が元気な東京大学にしたいと考えます。

### 古田 元夫 Motoo FURUTA

昭和49年3月 教養学部卒業  
昭和53年3月 大学院社会学研究科博士課程中退  
平成7年4月 教授(教養学部)  
平成13年2月～平成15年2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長  
平成16年4月～平成17年3月 副学長  
〔所属講座(研究部門)〕 地域文化研究専攻多元世界解析大講座  
〔専門分野〕 ベトナム研究  
〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕  
「ベトナムの世界史」(東京大学出版会)「ホー・チ・ミン」(岩波書店)、  
「アジアのナショナリズム」(山川出版社)

## 人・情報・制度の 基盤整備



浜田 純一  
国立大学法人東京大学理事  
東京大学副学長  
担当：総務、広報、評価、人事、  
情報公開・個人情報保護等

総務は、東京大学の教育・研究を発展させていくための、人・情報・制度などの基盤を整備する役割と考えています。そこには、男女共同参画やバリアフリー、教職員の規律、情報公開など、着実に進めていくべき課題がありますし、この4月からは個人情報保護制度への対応もはじまっています。また構造的な課題としては、業務見直しがあります。法人化のメリットを生かして、一方で成果主義などの効果的な活用を考えていくことが必要ですが、同時に、東京大学がこれまで培ってきた組織文化の良さも活かすことが大切です。東京大学の伝統的な力を、法人化をばねに、学生、教員、職員すべてが能力をより発揮できる形で展開できるような環境を整え

る努力をしたいと思います。

広報や評価という業務も、同様の意味で重要です。評価の仕組みについては、評価支援室での作業を着実にすすめながら、さらに学内の議論を深めて、評価の望ましいモデルを大学の側から積極的に打ちだすことができると考えています。広報という点では、『淡青』や東京大学のホーム・ページをより魅力あるものにする努力を続けたいと思います。とくに今年度からは各部局の広報担当者との連携を強化する体制をとりましたので、総合大学としての東京大学の魅力をより豊かに発信できると思います。また、学内のコミュニケーションの円滑化は、大学の総合力のいっそうの発揮につながります。部局という教育・研究の現場を大切に、それら相互、またそれらと本部との間のコミュニケーション・ルートの整備を通じて、相互の意思疎通や教育・研究をめぐる議論のいっそうの活発化が促進できるような環境を整えたいと考えています。

### 浜田 純一 Junichi HAMADA

昭和47年3月 法学部卒業  
昭和54年3月 大学院法学政治学研究所修了  
平成4年4月 教授(社会情報研究所)  
平成7年4月～平成11年3月 社会情報研究所長  
平成12年4月～平成14年3月 大学院情報学環長・学際情報学府長  
〔所属講座〕 社会情報学コース  
〔専門分野〕 情報法・情報政策  
〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕  
「メディアの法理」(日本評論社)、「情報法」(有斐閣)

## 創造を支える 構造



石川 正俊  
国立大学法人東京大学理事  
東京大学副学長  
担当：情報、産学連携

科学技術の構造の変化にともなう、企業でも大学でも、研究開発の方法が大きく変わろうとしています。真理を探究し学問の深化を求める大学の姿勢は何ら変わることはありませんが、社会における新しい価値を創造する姿勢が今まで以上に求められています。東京大学の研究活動は、情報化と国際化の大きな波の中で、ドッグイヤー（変化するスピードが通常の何倍にも相当すること）と呼ばれる時間感覚を適度に共有しながら、その基盤を整備することが肝要であると考えています。

産学連携は、東京大学の優れた研究成果を目にみえる形で社会に還元する活動として、ここ数年、積極的に基盤整備を進めてまい

りました。これまでの黎明期の活動から、今後は実績作りステージを移すこととなります。幸い実績も順調に伸びており、今後、大学の基本的な機能の一つとしてさらなる発展が期待できると思います。

一方で、新しい知識が一瞬にして全世界の共有物となる情報化社会の中で、大学が知識集約の主体であり続けるためには、創造を支援する情報システムの整備が、研究基盤の整備の一環として必要です。情報システムの組織的な整備により、様々な形で学内に存在する研究情報や教育情報の電子化はもちろんのこと、学務・財務等の事務の効率化のためにも、十分なセキュリティ基盤の上に、ネットワークを駆使した情報の創造・保護・管理・活用を目指したいと考えております。

このような整備は、東京大学がトップユニバーシティとしての力を遺憾なく発揮するための重要な手段であると考えています。学内外のご協力を得て、実効のある整備を進めていきたいと思ひます。

### 石川 正俊 Masatoshi ISHIKAWA

昭和52年3月 工学部卒業  
昭和54年3月 大学院工学系研究科修士課程修了  
平成11年4月 教授(大学院工学系研究科)  
平成13年4月 教授(大学院情報理工学系研究科)  
平成16年4月～平成17年3月 副学長  
〔所属講座(研究部門)〕 認識行動情報学講座  
〔専門分野〕 システム情報学  
〔研究内容(代表的な著書や論文等)〕  
センサ情報の並列処理、ロボット、ビジョンチップ、光情報処理

## トウダイ・ワン・サーティ 卒業生との連携・東大130 —基礎から飛躍へ—



池上 久雄  
国立大学法人東京大学理事  
担当：卒業生との連携、学友会、  
ホームカミングデイ、基金、運動会

昨年4月の法人化にあたって、従来東京大学では、ややもすると軽視される傾向もあった「卒業生との連携」を構築しようとする大学の意思を受けて、民間出身の唯一の理事として着任しました。

以来一年間、昨年3月の卒業式での「卒業生と大学とのパートナーシップが今日からはじまります」という総長メッセージからはじめて、10月の東京大学基金の設立、東京大学学友会の創設、海外各地の同窓会の設立、そして大学の主催としては初めてホームカミングデイの実施と、卒業生とのブリッジを立ち上げるべく一歩ずつ進んでまいりました。本年1月には、卒業生8万人に対して「東京大学学友会ニュース」を一人ひとりの手元に届けることができました。

東大基金の事務局には、事務スタッフとともに、卒業生をはじめとする基金ディレクターの方々が生き生きと活動してくださっています。まだまだ磐石とはいえませんが、連携の基礎が固まりつつあるということはいえましょう。

新しい年度は、この基礎の上に立って発展を期する年です。

まず、独り立ちした東京大学の財政的な基礎固めとしての大切なプロジェクトである「第3の創業・創立130周年記念募金」のキャンペーンを、2007年度末までの3年間にわたって全学あげて取り組んでいきます。小宮山新総長の新経営方針の下で、国内外にわたって展開されていくことが打ちだされており、この実現に向けて、東京大学基金は事務局として重要な役割を果たしていくことになります。

同時に、キャンペーン期間だけでなく、長期的に物心両面にわたって卒業生の強力な支援を受けていくことが大学にとっては必要不可欠なところで、そのためにも「東京大学学友会の着実な発展」を期したいと考えています。学内外の皆様の温かいご支援をお願いいたします。

### 池上 久雄 Hisao IKEGAMI

平成3年 三菱商事(株) 参与・職能担当役員補佐兼人事厚生部長  
平成10年 (社)日本貿易会常務理事  
平成12年 (社)日本貿易会常務理事兼国際社会貢献センター理事長  
平成16年4月～ 理事(兼任)



## 事務組織のあり方を変える



上杉 道世  
国立大学法人東京大学理事

担当：事務組織、労務、法務、倫理

私は、前年度に引き続き、事務組織及び労務を担当いたします。法人化によって最も変化を迫られている職種は、事務職員です。東京大学の教育研究が、世界最高水準を目指して飛躍しつつある現在、教育研究の活動を支える事務組織のあり方もそれにふさわしいものに変わらなければなりません。

しかし現状をみると、公務員時代の長年の習慣が色濃く残っています。決まったルールをきちんと守ったり、指示された業務を忠実に実行することは、それはそれで大切なことかもしれませんが、今後はそれだけでは不十分です。急激に変化する大学の業務の中で、教育研究の発展に何が重要かという観点から、新しい課

題を見出し、プランを立て、解決策を実行していく、そのような意欲と能力を一人ひとりの事務職員が身に付けなければなりません。

このため、私はこの1年間、「事務職員等の人事・組織・業務の改善プラン」を公表し、いくつかの新しい試みに取り組んできました。学内公募や希望調書の作成など職員の自発性を生かす人事異動の実施、業務の無駄を省いて合理的で効率的なものにする見直し、組織のフラットで柔軟なあり方への改変など、いくつかの前進はありました。

しかし、まだまだなすべき課題は山積しており、変化は始まったばかりです。私は、東京大学の事務組織が、教員や学生を支える機能を十分に発揮し、日本の大学のモデルとなり、さらには世界最高水準の組織という評価を得られるよう努力していきたいと思えます。

### 上杉 道世 Michiyo UESUGI

平成11年7月 文部省主任行政改革官  
平成12年6月 科技厅長官官房審議官  
平成13年1月 内閣府大臣官房審議官  
平成15年8月 事務局長  
平成16年4月～ 理事

## 法人化2年目、財務の課題



石堂 正信  
国立大学法人東京大学副理事

担当：調達、財務分析

法人化で最も大きな影響を受けたのは財務だったと思います。国からの運営費交付金が渡しきりになっただけではなく、財務処理の基準が根本的に変わったからです。最初の1年は、この新しい財務のあり方への対応に費やされたといっても過言ではありません。

発生主義という考え方で、順次会計処理が適時適切に行われていくことが必要とされ、月次決算そしてまた半期決算の試みが行われました。また、まだ限られたものではありますが、法人としての自由度を活かした予算の仕組みも導入されました。さらに、資金の全学一括管理が実現して余裕資金の運用が開始され、いくばくかの運用益も手にすることができました。

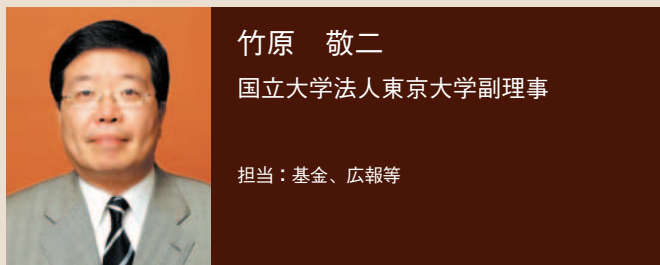
そんな中で1年が経過し、年度末決算が控えています。これまでは「国立学校特別会計」の一部だったものが、今度は東大のひとつの財務諸表として世の中に出ていきます。企業においては、財務の仕事とは「どんな財務諸表を作るかだ」といわれます。東大が果たした業績をどのように財務諸表に示すか、つまり、立派な財務諸表になるように予算の段階からよく考えていくのが財務の責任ということになります。

その意味で、残念ながら法人化1年目にははかばかしい進捗を見なかったのが、調達面の改善でした。東大では、いつ、どこで、何を、いくらで、どれだけ買ったのかというデータの蓄積が決定的に不足しています。何とか改善の手掛かりが得ようとする中で1年が過ぎてしまいました。2年目の課題は、物品・役務調達の制度的改善によるコストダウンであると思います。

### 石堂 正信 Masanobu ISHIDO

平成13年6月 (株)JR東日本企画取締役経理局長  
平成15年12月 総長室顧問  
平成16年4月 副理事

# 財務力の強化と マネジメント改革



竹原 敬二

国立大学法人東京大学副理事

担当：基金、広報等

昨年度は、“国立大学の法人化とは何か？ 新しい経営ボードは、何をなすべきか？”といったテーマを自問自答しながらも、積極的に諸課題にチャレンジした1年でした。

28年間経済界にいたものとして、この1年の最大の新しい収穫は、“大学”という存在への正しい理解であったと思います。約4000名の教員の一人ひとりが、世界レベルでの純粋な知の探求と若者への情熱溢れる教育に取り組む存在。経営ボードは、そういった研究者学生が、落ち着いて学べる、しかも必要な時には潤沢な予算と環境を、いかにして提供できる仕組みをつくれるか、が役割です。しかも、国の財政は逼迫しておりますし、社会保障コストがますます

す膨れあがる国の財政状況の中で。

大変微力でありますし、大学の正しい理解も、まだまだ不足ではありますが、東京大学がさらに世界トップの大学力を持てますよう、担当をいただきました、財務力強化のための東京大学基金の新しいスキームづくり、研究者学生がよりよい環境で学べるための、種々のマネジメント改革のお手伝い、また東大らしい学生のキャリアサポートに邁進してまいります。

どうか、学外のOBの皆様、また日本の学術、教育に期待をお寄せいただいております皆様の、なお一層のご助言、ご指導そしてご協力を賜れますようお願い申し上げます。

## 竹原 敬二 Keiji TAKEHARA

昭和51年 岡山大学法文学部卒業  
同年 (株)リクルート入社  
平成7年7月 (株)リクルート取締役  
平成13年4月 (株)リクルート常務執行役員  
平成16年1月 東京大学総長室顧問(兼任)  
平成16年4月 副理事

## 役職員一覧

職名	氏名	前職	担当
総長	小宮山 宏	理事(副学長)(元工学系研究科長)	
理事(副学長)	桐野 豊	薬学系研究科教授(前薬学系研究科長)	研究、国際交流、環境安全等
理事(副学長)	西尾 茂文	生産技術研究所長	財務、施設、キャンパス・交通、柏、病院等
理事(副学長)	古田 元夫	副学長(元総合文化研究科長)	教育、学生、入試、留学生等
理事(副学長)	浜田 純一	大学院情報学環教授(元大学院情報学環長)	総務、広報、評価、人事、情報公開・個人情報保護等
理事(副学長)	石川 正俊	副学長(情報理工学系研究科教授)	情報、産学連携
理事	池上 久雄	社団法人日本貿易会常務理事	卒業生との連携、校友会、ホームカミングディ、基金、運動会
理事	上杉 道世	東京大学事務局長	事務組織、労務、法務、倫理
監事	石黒 光	特定非営利活動法人言論NPO理事(非常勤)	
監事	佐藤 良二	公認会計士(監査法人トーマツ東京地区業務執行社員)	
副理事	石堂 正信	(株)JR東日本企画取締役経理局長	調達、財務分析
副理事	竹原 敬二	(株)リクルート常務執行役員	基金、広報等
副理事	片山 直久	興和不動産(株)常務取締役	施設、基金



## 柏図書館 本オープン

東京大学柏図書館は、平成16年5月の部分開館の後、蔵書とサービス、諸設備の充実に向けてまいりましたが、本年2月22日に行なわれました開館記念式典をもって正式に開館いたしました。

柏図書館は、東京大学が柏キャンパス創設にあたって掲げた理念である「学融合」とその実現のための基本的な精神である「知の冒険」を实践する場として生まれました。また、柏図書館は、次世代型図書館として従来の図書館にはない機能を縦横に組み込んでいます。それらの機能の代表例として、ハイブリッドライブラリー機能、サイバーメトリック機能、ソーシャルコミュニケーション機能を挙げることができます。

総ガラス張りの柏図書館は面積5,700m<sup>2</sup>の二階建てで、柏キャンパスの前面左寄りに位置しており、現在の柏キャンパスのシンボルの存在になっています。2階は閲覧室、閲覧個室、ナレッジワークスタジオ、AVコーナー、検索コーナー、複写コーナー、サービスカウンターなどからなっており、2階がすべての図書館機能を担うことができるように設計されています。2階の約3分の2を占める閲覧室には、約10万冊を配架できる開架書架と243席の閲覧席が用意されています。また、各席には、電源、情報コンセントが装備されており、閲覧室内では無線LANも利用することができますようになっていきます。ゆったりとした閲覧席で周りに気を取られることなく、最新のITを利用しながら学習、研究成果取りまとめ、論文作成などができるように配慮されています。

柏図書館は、柏キャンパスの学生、研究員、教職

員に対する学習支援機能を中心機能としていますが、その他にも教育支援機能、研究支援機能を兼ね備えており、柏キャンパスにおける情報の蒐集と発信の中心的役割を担っています。館内には学習、研究に不可欠な一般教養書から専門書までの資料をそろえる一方、国内最大規模の自動化書庫を備え、全学資料共同利用センターとしての役割も果たしています。自動化書庫に収容された資料は、e-DDS(電子の文献伝送システム:利用者がWebを利用して文献提供を申し込むと、自動化書庫への出庫指示・自動出庫、ブックスキャナによる電子ファイルの作成をへて、利用者が電子ファイルとなった文献をURLで受け取るシステム)によって全学で利用可能です。OPAC(Online Public Access Catalog)と自動化書庫の連結によって、離れたキャンパスの利用者への文献提供サービスが飛躍的に向上します。このe-DDSサービスは、今後国内の大学図書館はもとより米国の研究図書館や韓国の大学図書館にもサービスを拡大する計画でいます。このほか、e-Journal(電子化雑誌)、e-Book(電子化本)や各種データベースなど電子化資料の提供を積極的に行なっています。また、全学に先駆けて修士論文、博士論文の電子化とWebによる公開の準備をしており、電子図書館機能の充実を計っています。

柏図書館は、柏キャンパスの学生、研究員、教職員へのサービスばかりでなく、学内の図書館ネットワークを通じて全学にサービスを提供するとともに、社会との連携にも積極的に取り組んでいます。情報公開に基づく柏図書館の一般開放はもとより、近隣の住民、研究者、技術者などの皆さんに柏図書館が保有する情報・資料を提供し、地域文化の向上、地域産業の育成・強化に貢献します。また、地域にも活用され愛される図書館を目指して「柏図書館友の会(仮

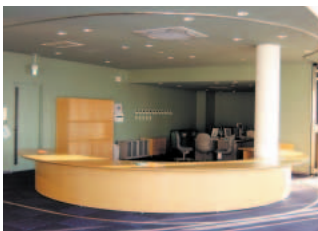
称)」を立ち上げ、地域の要望を汲み上げるとともに、幅広く支援していただけるシステムを構築する予定にしています。

図書館の1階には、セミナー室(3室)、コンファレンスルーム、ラーニングサポートサービス(情報基盤センター教育用計算機システムの端末を設置)があります。さらに、最新映像・音響設備を有するメディアホール(144席+補助席26席)や、可動式パネルを装備しつろげる椅子を配置したコミュニティサロンなどのコミュニケーションスペースも用意されており、学習・教育・研究・文化交流・地域交流の場を提供しています。また、L字型の広いロビーを備えており、そこに軽食・喫茶を楽しみながらリラックスできる場を整備することも計画しています。

このように柏図書館は、従来の図書館機能とともに交流機能をあわせ持つとともに、憩いの場を提供することも使命としています。柏図書館は時代の変化に対応し、これまでにない新しい日本の大学図書館モデルを築き上げることを目指しています。是非一度柏図書館にお越し下さい。



柏図書館全景：東側より望む



サービスカウンター：利用者登録、LLサービス、資料やパソコンの貸し出し等を行っています。



閲覧室：座席は243席を用意。各席には電源及び情報コンセントが整備されています。閲覧室内は無線LANが利用できます。



開架書庫：約10万冊の図書の収納が可能です。



ラック：資料を収めたコンテナを効率よく収めます。



検索コーナー：検索用PCを4台用意。蔵書検索のほか、各種データベース、電子ジャーナル、eBook等の利用が出来ます。



出納ステーション：自動化書庫からの資料の取り出し、返却を行います。



自動化書庫内部(垂直搬送機)



e-DDS(電子的ドキュメントデリバリーサービス)



自動化書庫内部(スタッカークレーン)



柏図書館全景：西側より望む。右側の部分が自動化書庫

# 東京大学研究・研究者検索システムのサービス開始

東京大学は、2005年1月から産学連携支援ツールとして、東京大学研究・研究者検索システム(英語名:U-Tokyo Research & Researcher Search System、愛称RR)のサービスを開始しました。

東京大学では、2004年4月に設立した産学連携本部を中心に、社会との密な連携をめざして様々な展開を図っています。その展開の一事業として産学交流の場の提供を行っており、このたびの東京大学研究・研究者検索システムは全学の研究課題・研究者の情報を広く社会に提供し、東京大学が持つ知的財産をより有効に活用する支援の実現を目指しています。

本システムでは、東京大学のホームページを研究課題や研究者について検索することができます。検索の特徴として、専門用語を必ずしも必要としない自然文で検索文を入力可能で、データマイニングや自然言語処理技術によって、検索文に関連する研究者・関連語・関連法人などを結果として表示することが可能です。

本サービスは、一般に公開しており、誰でも無料で利用可能です。

URL: <http://rr.ducr.u-tokyo.ac.jp/>よりアクセス可能です。

なお、本システムは、2003~2004年度の東京大学、三菱総研、沖電気によって行われている共同研究において開発された産学連携支援ツールBluesilk® (<http://www.bluesilk.biz/>)を用いて構築されています。

本システムの活用によって、社会から東京大学の知的財産へのアクセスがより容易で活発になり、さまざまな形の産学連携への足がかりになることが期待されます。



検索画面

# 東京大学大学院理学系研究科1号館 小柴ホール落成記念式典行われる

東京大学大学院理学系研究科では、新棟の落成にあわせて小柴昌俊特別栄誉教授のノーベル賞受賞を記念した「小柴ホール」と、理学研究の成果を展示するスペースをオープンしました。同ホールのこけら落としとして小柴ホール落成記念式典が3月3日(木)に開催され、小柴特別栄誉教授の講演も行われました。

「小柴ホール」は収容数200名の会議場で、最新鋭の映像設備やインターネット中継設備を備え、研究会や国際会議など学術に関する会合に使用できます。また、一般来訪者が入構可能な1階エントランス部分には展示スペース(サイエンスギャラリー)が設けられ、カミオカンデや超新星爆発などの解説のほか、ノーベル賞メダルも飾られています。



テープカットの様子:左から佐々木総長、小柴特別栄誉教授、岡村大学院理学系研究科長



サイエンスギャラリー:小柴教授のノーベル物理学賞メダルと賞状



サイエンスギャラリー全景



竣工した小柴ホールで記念講演を行う小柴特別栄誉教授

# 東京大学学友会への入会案内

東京大学学友会が平成16年10月に発足しました。東京大学学友会は、それ自身が同窓会活動を行うのではなく、いままで学部・サークル・地域などそれぞれ活動していた各種同窓会団体や、同窓会に属せなかった国内外の卒業生を、大学とのパートナーシップの概念のもと、大学が提供する一つのネットワークでゆるやかに束ね、大学と卒業生相互の連携とコミュニケーションを促進し、社会に高く評価される東京大学コミュニティーの育成と発展を図ろうとするものです。

学友会会長は大学総長が努め、会長指名にて同窓会団体の役員、卒業生が役員を務めます。参加会員は会を代表する代議員を通じて学友会運営に参加します。

学友会事務局は、卒業生連携担当理事のもと、大学学生部内に置かれ、大学事務局スタッフと会員同窓会ボランティアが協力し学友会業務を遂行します。

東京大学学友会は、会員へ提供される学友会ニュース(季刊)、学友会ホームページなどの広報手段や、学友会事務局をハブとした学友会会員ネットワークを通じて、下記の事業を行います。

1. 大学・教職員と卒業生を結びリンクとして、大学の様々な動きや、講座・講演などのイベント、教育プログラムなどについて、最新の情報を届けるとともに、大学が持つ豊富な人的・物的資源を卒業生が活用できるよう支援します。
2. 会員の運動会・文化サークル・地域など各同窓会の活動・イベントをより多くの卒業生へ広報するお手伝いをします。
3. 卒業生と大学の絆を深めるよう、毎年の大学主催ホームカミングデイや、各種の大学または同窓会によるイベントに協力、支援します。
4. 国内外の地域ごと、業種別など新たな地域同窓会の設立、既存同窓会の活性化など支援いたします。
5. その他、会の趣旨に添った大学と卒業生を結ぶ種々の事業・サービスが計画されています。皆様からの新たな企画ご提案を歓迎いたします。

会員は、原則として主に同窓会団体同窓会に参加できない国内外の卒業生、教職員や在学生にも入会の道を開いております。より多くの卒業生が入会し、東京大学卒業生の連携と交流が推進されるよう希望します。学友会への入会希望の団体又は個人は、下記までご連絡ください。

東京大学学友会事務局  
電話03-5841-1216  
e-mail: [gakuyukai@adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:gakuyukai@adm.u-tokyo.ac.jp)  
URL: <http://www.alumni.u-tokyo.ac.jp>



## 平成17年度中に竣工する建物 —工学系総合研究棟—

大学院工学系総合研究棟は、安田講堂前の前広場に面し、歴史的景観の継承に配慮するため、工学部2号館の半分を保存するとともに、その上部空間を利用して、大学院工学系研究科の新たな中核施設となるべく、機能要請に応えたボリューム配置としました。

各階の構成は、特殊な条件を必要とする実験室は地下階、講義室は低層階、研究室と一般的な実験室は高層階へと機能分けを行い、基準階の研究室と実験室は、様々な要望に対応可能となるよう、単一モジュールの可動間仕切壁により、フレキシビリティのある計画としています。

建物構造は、安全性を高め、建物の損傷を減らすために、地震時の“ゆれ”を減衰させる制震構造を採用しています。



工学系総合研究棟

## 「平成16年度第2回東京大学総長賞」の受賞者決定される —授与式及び特別講演の開催について—

学生表彰選考委員会(委員長:大垣眞一郎大学院工学系研究科教授)では、今年度第2回表彰の実施に向けて、本学各方面から推薦された合計39件の候補者を慎重に選考審査し、以下の個人9名及び1団体を選出しました。

授与式は3月24日(木)に実施され、東洋文化研究所長の田中明彦教授による特別講演の他、受賞者への表彰状及び記念品の授与、総長の挨拶、各受賞者(個人・団体)からのプレゼンテーションが行われました。

受賞者  
個人の部

- ・松本 翔(教養学部文科一類、陸上運動部)  
21年ぶり箱根路を走る「東大ランナー」
- ・Vo Trong Nghia(大学院工学系研究科博士課程1年)

ベトナム古民家と都市における風環境の研究と設計活動

- ・佐藤 政達(法学部4年)  
法学部成績優秀者
- ・村上 尚加(医学部5年)  
生命科学における貢献
- ・大栗 真宗(大学院理学系研究科博士課程3年)  
重力レンズ現象を用いた宇宙の構造進化の解明
- ・森田 健司(経済学部4年)  
経済学部成績優秀者
- ・千住 淳(大学院総合文化研究科博士課程3年)  
自閉症研究における卓越した業績とそれに対する国際的評価、および医療保健現場への社会貢献
- ・菅谷 拓生(教養学部4年)  
途上国の金融と公的機関の効率性の研究
- ・戸田 幸伸(大学院数理学系研究科博士課程1年)  
数理学系研究科成績優秀者

団体の部

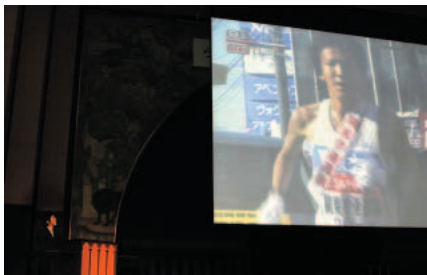
- ・東京大学柏葉会合唱団  
高水準学生合唱団としての演奏と社会貢献

特別講演

講演者:田中 明彦教授(東洋文化研究所長)  
題目:「東アジアの台頭  
危機の国際政治とコミュニティ形成」



総長賞を授与される受賞学生



総長賞受賞者によるプレゼンテーション

## 「東京大学稷門賞」(平成16年度後期)授賞式を挙

平成17年3月7日(月)武田先端知ビル武田ホールにおいて「東京大学稷門賞」授賞式が挙行政され、佐々木総長から各受賞者の方々へ賞が授与されました。

本表彰は、寄附、ボランティア活動、および援助等により本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体に対し授与するものです。顕彰について

は、年2回行うこととしています。

受賞者一覧

1 石川 六郎 殿

授賞理由:石川氏は平成7年6月発足の東京銀杏会会長(平成13年3月まで会長代理)、および東京大学同窓会連合会の中核的指導者として、本学との連携促進並びに社会に対する本学および卒業生の評価を高めることに大きく寄与。

2 木下 祝郎 殿

授賞理由:木下氏は(財)応用微生物学研究奨励会理事長として多年にわたり応用微生物研究所および分子細胞生物学研究所に対し研究助成等の支援を行うなど同研究所の研究教育活動のために尽力。また、同人はアミノ酸発酵の研究に従事され日本学士院賞、勲訓二等旭日重光賞等を受賞されるなど研究に関しても高い業績を挙げている。

3 株式会社トミー精工

代表取締役社長 富永 健二郎 殿

授賞理由:医学系研究所が中心となり平成6年から現在まで11回実施している東アジアシンポジウムの開催に係る助成(寄附)等および平成17年度「再生基礎医学寄附研究部門」の設置に関し中心的役割を果たすなど、同研究所の研究・事業に大きく貢献。

4 東日本旅客鉄道株式会社

代表取締役社長 大塚 陸毅 殿

授賞理由:工学系研究科に「交通基盤防災工学」「ヒューマンウェア工学」「自立メカトロニクス工学」「メンテナンス工学」の寄附講座の設置を4期12年に渡り継続的に行っている。これらの寄附講座の設置は同研究科の研究教育活動に大きく貢献。



稷門賞授賞式の様子

## 平成17年度東京大学ホームカミングデイの開催

平成17年度「東京大学ホームカミングデイ」が2005年11月19日(土)に開催される予定です。「東京大学ホームカミングデイ」は、東京大学同窓会連合会が主催していましたが、平成16年度から東京大学が主催し、東京大学同窓会連合会が共催という運営形態に切り替え、より多くの卒業生の方々に盛りだくさんの企画を用意しております。

企画内容一部紹介

- 1 大講堂イベント(講演会・音楽会など)
- 2 大学施設見学
- 3 各学部イベント(講演会・懇親会など)

# Information

## 東京六大学野球春季リーグ戦

4月9日～5月29日

明治神宮野球場

お問い合わせ：学生部学生課体育チーム

Tel: 03-5841-2511

(参考) 東京大学運動会ホームページ

<http://www.undou-kai.com>

## 東京大学大学院理学系研究科・理学部

### 第7回公開講演会

「理学研究が探る宇宙・地球・生命」

4月28日(木) 18:00～20:30(17:00開場)

参加費：無料(当日先着240名)

東京大学駒場キャンパス

数理科学研究科大講義室

お問い合わせ：東京大学大学院理学系研究科庶務係

Tel: 03-5841-7585

e-mail [shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp](mailto:shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp)

## 第57回東商戦

### 対一橋大学ポートルース

5月1日

お問い合わせ：学生部学生課体育チーム

Tel: 03-5841-2511

(参考) 東京大学運動会ホームページ

<http://www.undou-kai.com>

## インディアナ大学宗教学

Ann M. Mongoven 助教授特別講演

Gift of Life versus Relay of Life: Implications of Organ Donation Rhetoric

5月9日午後5～7時

医学図書館3階333教室

お問い合わせ：医学系研究科健康学習・教育学分野

高橋 都

Tel: 03-5841-3514 (事前申し込み不要)

## 一般講演会「ニュートリノ」

5月15日(日) 14:00～

アミュゼ柏

お問い合わせ：宇宙線研究所

宇宙ニュートリノ観測融合センター

Tel: 04-7136-3138

URL: <http://www.rccn.icrr.u-tokyo.ac.jp/index.html>

## 医科学研究所創立記念シンポジウム

6月1日(水) 13:00～17:00

医科学研究所構内

お問い合わせ：総務課庶務係

Tel: 03-5449-5572

## 工学部電気・電子・電子情報工学科

### 研究室公開

6月1日(水)

工学部3号館、9号館、10号館、13号館、14号館の各研究室

お問い合わせ：工学部電気・電子・電子情報工学科

<http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/OpenHouse2005.html>

担当：山下真司(電子工学専攻助教授)

Tel: 03-5841-6659 or 6783 Fax: 03-5841-6025

E-mail: [syama@ee.t.u-tokyo.ac.jp](mailto:syama@ee.t.u-tokyo.ac.jp)

## 先端科学技術研究センター

### オープンキャンパス

6月2日(木)～6月3日(金)

駒場リサーチキャンパス(駒場Ⅱキャンパス)

お問い合わせ：先端科学技術研究センター

研究協力係

Tel: 03-5452-5381

## 京大戦

### 対京都大学ポートルース

6月25日

お問い合わせ：学生部学生課体育チーム

Tel: 03-5841-2511

(参考) 東京大学運動会ホームページ

<http://www.undou-kai.com>

## 保健体育寮夏期開寮

7月中旬～8月下旬

各保健体育寮：

《戸田寮》静岡県田方郡戸田村戸田2710-3

《山中寮》山梨県南都留郡山中湖村平野506-296

《下賀茂寮》静岡県賀茂郡南伊豆町加納463

《乗鞍寮》長野県安曇郡安曇村字高原4307-7

お問い合わせ：学生部学生課体育チーム

Tel: 03-5841-2511

(参考) 東京大学運動会ホームページ

<http://www.undou-kai.com>

## 第1回研究所ネットワーク

### 国際シンポジウム

7月22日(金)～24日(日)

医科学研究所構内

お問い合わせ：癌・細胞増殖部門分子発癌分野

井上教授

Tel: 03-5449-5275

## 21世紀COEプログラム

「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」主催の国際シンポジウム

International Symposium on Advanced Electronics for Future Generations

—“Secure-Life Electronics” for Quality Life and Society—

10月11日(火)～12日(水)

武田ホール(東京大学本郷キャンパス浅野地区・武田先端知ビル5階)

お問い合わせ：21世紀COEプログラム

「未来社会を担うエレクトロニクスの展開」

拠点リーダー 保立和夫(電子工学専攻教授)

シンポジウムプログラム委員長 田中雅明(電子工学専攻教授)

COE事務局 e-mail: [coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp](mailto:coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp)

Tel: 03-5841-6793 Fax: 03-5841-1160

## 柏キャンパス一般公開

(物性研究所・宇宙線研究所・新領域創成科学研究科・気候システム研究センター・空間情報科学研究センター・人工物工学研究センター・高温プラズマ研究センター共催)

10月28日(金)～29日(土)

柏キャンパス

お問い合わせ：企画課企画・渉外係

Tel: 04-7136-3107

e-mail: [opc@icrr.u-tokyo.ac.jp](mailto:opc@icrr.u-tokyo.ac.jp)

物性研究所 柏地区庶務課庶務係

Tel: 04-7136-3207

宇宙線研究所 柏地区企画課総務係

Tel: 04-7136-3102

大学院新領域創成科学研究科

柏地区学務課総務係

Tel: 04-7136-4003

気候システム研究センター

空間情報科学研究センター

人工物工学研究センター

高温プラズマ研究センター

柏地区4センター支援事務室

Tel: 04-7136-4434

# 淡青

[ TANSEI ]

2005/04

東京大学広報誌

The University of Tokyo Magazine April, 2005 Vol.15

# 15

本号の編集にあたっては、学内はもとより学外の方々からも多くのご助力をいただきました。

東京大学では、本郷、駒場、柏地区キャンパスの3極構造構想において、学問の発展や社会状況の変化に対応した教育・研究の将来構造の実現を図っています。ディシプリン追求型の本郷、インターディシプリナリー(学際)型の駒場に対し、柏はトランスディシプリナリー(学融合)型を志向しています。これは、固有の分野を再編して、横断的な新しい分野を創成しようとする試みです。表紙は柏キャンパスにある宇宙線研究所の写真です。天空に向かって丸く大きく開いた天井が特徴的です。

編集発行/東京大学広報委員会

編集協力/山崎 優子 デザイン/長谷川 恵一 撮影/尾関 裕士

印刷/サンニチ印刷

発行日/平成17年4月30日

東京大学総務部広報課

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 TEL: 03-3811-3393 FAX: 03-3816-3913 E-mail: [kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp) URL: [http://www.u-tokyo.ac.jp/index\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html)





東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

淡青

[TANSEI]

東京大学広報誌 第15号

The University of Tokyo Magazine April, 2005 Vol.15

2005/04

15

発行日/平成17年4月30日

編集発行/東京大学広報委員会

東京大学総務部広報課

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

TEL: 03-3811-3393

FAX: 03-3816-3913

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.u-tokyo.ac.jp>